

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## 家族の庭

2010年・イギリス映画  
配給/ツイン  
130分

2011 (平成 23) 年 10 月 6 日鑑賞

角川映画試写室

### Data

監督・脚本：マイク・リー

出演：ジム・ブロードベント/ルー  
ス・シーン/レスリー・マン  
ヴィル/ピーター・ワイト/  
オリヴァー・モルトマン/カ  
リーナ・フェルナンデス/デ  
ヴィッド・ブラッドリー/マ  
ーティン・サヴェッジ/ミシ  
エル・オースティン/フィ  
ル・デイヴィス

## 👁️👁️ みどころ

ハリウッド大作はCGや大音響が花盛りだが、カンヌで好評を得た本作は、食事風景にみる家族や友人たちの会話劇がポイント。初老を迎えた理想的な夫婦もいいが、男運の悪い独身女や、身の置き場のない男たちは？

人生を語るには、菜園で採れた新鮮な野菜とおいしいワインがあればいい。そんな視点から、それぞれの人生をあらためて考えてみては・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■初老の夫婦の理想像がここに！■□■

イギリスには日本のような団塊世代はないはずだが、本作に描かれる初老の夫婦は息子のジョー（オリヴァー・モルトマン）が30歳になったところというから、きっと私たち団塊世代と同じ年頃。本作は、春・夏・秋・冬を通して市民菜園でガーデニングを楽しみ、そこで採れた新鮮な野菜でおいしい料理をつくり、ワインを飲みながら「友人」たちとそれを楽しむ仲のよい初老の夫婦が描かれる。もともと、地質学者である夫のトム（ジム・ブロードベント）も医学カウンセラーである妻のジェリー（ルース・シーン）もまだ現役で働きながら、休日だけそろってガーデニングを楽しんでいるらしい。また家を出ている一人息子のジョーも弁護士というから、きっと経済的には十分安定しているはずだ。

唯一の心配事（？）は、昨今の日本の若者と同じように、ジョーの結婚がなかなか決まらないこと。しかしこれも、映画中盤にサプライズのように連れてくる恋人のケイティ（カリーナ・フェルナンデス）が明るくいいお嬢さんだったから、トムもジェリーも大喜び。まさに、初老の夫婦の理想像がここに！

## ■□■他方で、不幸な男女も・・・■□■

結婚は互いの束縛を伴うものだから、自由を謳歌するためには独身の方がベター。そんな考え方もあり、現に初老になっても理想的な独身生活をエンジョイしている人もいるが、きっとそれは少数派。若く元気な時はともかく、中年から初老にもなると人間にはやはり何らかのパートナーが必要？ジェリーの同僚で、しょっちゅうトムとジェリーの家を訪れ、昼食や夕食をご馳走になっている独身女メアリー（レスリー・マンヴィル）や、40年近く職業安定所で働いていながら、孤独な現状を嘆きビールばかり飲んでいる2人の古くからの友人ケン（ピーター・ホワイト）の姿を見ていると、そう痛感せざるをえない。

車を買ったことによって新しい人生が開けてきたとはしゃぐメアリーが平気で飲酒運転をするシーンは問題だが、それ以上のメアリーにとっての根本的な問題は、自分の生き方が確立できていないこと。また、男運がないと嘆くのなら、腹が出っ張っているとはいえ、せっかくケンが自分にモーションを示してくれているのだから、そこで妥協するのも一案。ジョーにとっての「叔母さん」的位置付けだったメアリーが、30歳でまだ売れ残っているとはいえ、ジョーに対して色目を使うのは最悪。まして、ジョーの恋人のケイティにはじめて引き合わされた時、敵対心を露骨にするとはもっての他・・・？

## ■□■原題より邦題の方が断然ベター！■□■

ヴィヴァルディ作曲の『四季』はクラシックではきっと世界一有名な曲で、そこで描かれる春夏秋冬は実に味わい深い。『Another year』という本作の原題はイマイチ意味がよくわからないが、本作は春・夏・秋・冬の四季に分けてトムとジェリー夫婦を中心とする人間関係を淡々と描いていく。ヴィヴァルディの『四季』は春夏秋冬が鮮やかに区別されているし、季節感と言えば9番『クロイツェル』ソナタとともにベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタで最も有名な5番『スプリングソナタ（春）』も、春真っ盛りという味わいがある。

しかし、本作における春・夏・秋・冬の区別は、私にはあまり意味があるとは思えない。時系列的には、春の後は夏、その後は秋と進んでいくのは当然だが、本作におけるストーリー展開をわざわざ春・夏・秋・冬と4等分するほどの意味は薄いのでは？それに対して邦題は原題とは全く異なる『家族の庭』だが、本作のタイトルとしてはどちらがベター？私は原題よりこの邦題の方が断然ベター！と思うのだが・・・。

## ■□■もう1人不幸な初老の老人も・・・■□■

とはいっても、春・夏・秋・冬に分けた最後の冬には、もう1人不幸な老人ロニー（デヴィッド・ブラッドリー）が登場してくるから、春・夏・秋・冬とストーリーを分けたのも一理あり？故郷のダービーに住んでいるロニーはトムの兄だが、その妻の葬儀参加者は

ロニーの他はトム・ジェリー夫婦とケンに近所の数人だけというからさびしいもの。

ここから展開されるストーリーのポイントは、葬儀に遅れて参加してきた息子のカール（マーティン・サヴェッジ）の出来の悪さ。長い間親元に連絡もしなかったせいで、「母親の死亡をなぜ俺に連絡しないのだ」とロニーにかみついでいく姿は実に見苦しい。妻に旅立たれたうえ、久しぶりに帰ってきた息子からボロクソに言われたのではロニーも大変だ。トムとジェリーから「しばらくロンドンの家に住んだら・・・」とやさしい言葉をかけてもらえたからよかったものの、このままロニーが1人ダービーに住んだら、近々待っているのは孤独死のみ・・・？



(C) 2010 UNTITLED 09 LIMITED, UK FILM COUNCIL AND CHANNEL FOUR TELEVISION CORPORATION

## ■ポイント、食事風景と会話■

本作はスリルとサスペンスもなければ、ハリウッド大作のようなCG処理も大音響もなく、淡々とベテラン俳優たちの「家族の庭」における食事風景とそこでの会話を楽しみながら、それぞれの人間ドラマに思いをめぐらしていく映画。したがって、制作費は食事の材料代やワイン代が予想以上にかかったかもしれないが、あまりかかっているとは思えない。もちろん、映画は制作費によってその良し悪しが決まるのではなく、本作ではベテラン俳優たちの味わい深いセリフ劇がポイントだ。

春夏秋冬の全編を通じて、とにかく本作には食事風景が多いが、本作をみると、食事風景にも、ホントにみんなが楽しんでいるものと何となくぎこちないものがあることがわかる。ジョーがはじめて恋人のケイティを連れてきた、秋のシーンにおける食事風景は

そりゃ賑やかで明るいものだったが、冬のシーンにおける「招かれざる客」の場合は？

## ■招かれざる客にどう対応？■

冬のシーンにおける「招かれざる客」とは、メアリーのこと。今はロニーが同居しているトムとジェリー夫婦の家に、トムとジェリーが菜園に出かけている留守に、予約もなくいきなりメアリーが訪れてきたからロニーはびっくり。ここで初対面となった2人のぎこちない会話も面白いが、菜園から戻ってきたトムとジェリーが示す明らかな「とまどい」の表情も面白い。だって、今日はジョーとケイティを招いた家族そろっての夕食が予定されていたのだから。そんな時に、不意の「招かれざる客」は迷惑そのものだ。ジェリーはメアリーに対し、はっきり「家族とは違うのよ！」と釘をさしたが、同時に「食事はたっぷりあるから一緒に」とやさしく声をかけてくれたからメアリーはひと安心。しかし、ここまで精神状態が不安定になれば、ジェリーが言うように、メアリーはカウンセリングを受けた方がいいのでは？そんな状況下、さあ「招かれざる客」メアリーは、いかなる反応を？

本作はちょっと意外な形でエンディングを迎えるから、それに注目したい。この終わり方をみると、本作の主人公は、いろいろと問題の多い不幸な女メアリーのようだ。そしてそう考えると、メアリーを演じたレスリー・マンヴィルが、ナショナル・ボード・オブ・レビューやロンドン映画批評家協会賞で主演女優賞を受賞したのもうなずけるというものだ。

2011（平成23）年10月8日記

### 中国では、瀕死女兒を見て見ぬふり？

1) 『水曜日のエミリア』、『ツリー・オブ・ライフ』、『家族の庭』にみる米、英の家族の絆はメチャ強いが、さて中国では？個人を尊重する欧米と違い、中国も韓国も日本も家や家族を大切にす社会だから、家族愛は西欧に負けるはずがない。きっとそれが模範回答だろうが、一方で「一人っ子政策」が定着し、他方で「拝金主義」が蔓延する中国では、瀕死女兒を見て見ぬふり？

2) 10月19日の新聞各紙は、「中国広東省仏山市で2歳の女兒が車にひか

れ、血を流して倒れているのに通り掛かった18人の人々は誰も助けようとせず、女兒は別の車にもひかれた後に病院に搬送、意識不明の状態が続いている」と香港共同発のニュースを伝えた。中国では「現場の一部始終を収めた防犯ビデオ映像がインターネット上に出回り、『中国の経済は発展したが、道徳は失われた』などと嘆きの声が相次いでいる」とのことだが、中国ではホントにここまでモラルは崩壊しているの？

2011（平成23）年11月9日記